

「どうしよう……」

連載中の男女ものの官能小説。

今回、男性に抱かれるヒロインの濡れ場がどうしてもうまく書けずにいた。設定そのものには迷いが無い。問題は、男性に抱かれる側の感覚を、どう書けば読者へ生々しく伝えられるのかということだった。僕自身はカントボーイだから、女性器へ挿入される感覚を想像だけで済ませる必要はない。それでも実際に男性へ身体を預けた経験はなく、細かな感覚までは分からなかった。

胸元へ触れられたときの身体の強張り方。脚を開かされたときの羞恥。自分とは違う体格の男に抱え込まれたとき、どこへ体重がかかり、どれほど自由が利かなくなるのか。想像だけでは文章が薄くなり、何度読み返しても納得できない。その間にも、締切だけが着実に迫ってくる。

(誰かに相談するしかないかも……)

僕はタブレットを伏せ、天井を仰いだ。机には印刷した原稿と資料の本が積み上がり、その隣では空になったコーヒーカップが冷えている。

蛭来の顔を思い浮かべたのは、そのときだった。

蛭来は幼い頃からずっと一緒にいる幼馴染だ。

おっとりしていて滅多に声を荒らげず、僕が小説家になってからも、締切前になると食事を持って様子を見に来てくれる。僕が特異体質であるカントボーイであることも、昔から知ってフォローしてくれていた。

仕事の内容まで話すのは少し恥ずかしい。それでも蛭来なら、変に騒いだり笑ったりはしないだろう。

僕はスマホを手に取り、メッセージを送った。

『今週末、少し手伝ってほしいことがあるんだけど、来られる？』

返信はすぐに届いた。

『もちろん。春太の頼みなら、何でも手伝うよ』

——そして当日。

「お邪魔します。春太、ちゃんとごはん食べてる？」

部屋へ入った蛍来は、持ってきた紙袋をキッチンへ置くと、散らかった作業机を見て困ったように微笑んだ。

「昨日は食べた」

「昨日じゃなくて、今日は？」

「……あとで食べる」

「それなら、手伝いが終わってから一緒に食べようか」

いつもと変わらない穏やかな声に少しだけ緊張が解ける。僕は蛍来を作業机の前へ座らせ、タブレットに表示した原稿を差し出した。

「今書いてる小説なんだけど、濡れ場の描写がうまくいなくて」

「読んでもいいの？」

「そこだけなら。笑わないでよ」

「笑わないよ。春太が一生懸命書いたものだもん」

蛍来は原稿へ目を落とした。ページを送る指が進むにつれ、柔らかな笑みが少しずつ薄くなっていく。やがて問題の場面まで読み終わると、蛍来はタブレットを膝へ置いた。

「つまり、抱かれている側の感覚が分からないんだね」

「うん。挿入まで試すつもりはないけど、体勢だけでも再現できれば、もう少し具体的に書けると思って」

「それで、僕を呼んだの？」

「頼めそうなの、蛍来しかいないから」

「……そうなんだ」

蛍来は嬉しそうに目を細めた。その表情が妙に印象に残ったが、僕は深く考えないまま、床へ敷いて

おいたマットを指差した。

「服は着たままでいいから。後ろから抱き込んで、腕と脚の位置を確認させてほしい」

「分かった。春太が望むとおりにするね」

蛍来がマットへ腰を下ろし、僕はその脚の間へ座った。背中が胸元へ触れた瞬間、想像していたよりも大きな身体に包み込まれる。長い腕が僕の腰へ回り、逃げ道を塞ぐように重なった。

「苦しくない？」

「大丈夫。もう少し強く抱いてみて」

「うん」

腕に力がこもり、背中が蛍来の胸へ密着する。耳のすぐそばで聞こえる呼吸に、僕の肩がわずかに強張った。

蛍来は昔から距離が近い。肩を抱かれたことも、眠ってしまった僕を背負ってもらったこともある。